

評定について (『AAA は 5』の誤解)

2003.12.17. 一瀬純司

例えば理科では次のようにしている。

学力	=	関心意欲	+	科学的思考	+	技能表現	+	知識理解
----	---	------	---	-------	---	------	---	------

したがって、各項の総和が学力の評価として 5 段階に評定されるのである。

いくつもの学校で、各項ごとの 3 段階評価 (ABC) の合計値を 5 段階評価に使っている (AAA なら 5、AAAB なら 4 というふうに)。しかし、それは誤りである。ここでは、それを単純な例を用いて明らかにする。

各項の評価点が図 1 のような二人の生徒、太郎さんと次郎さんがいるとする。

A									知識理解		
B	関心意欲	科学的思考	技能表現	知識理解				関心意欲		科学的思考	技能表現
C											
	太郎さん				次郎さん				[図 1]		

この場合、太郎さんは AAAA で、次郎さんは BBBA である。ところが、二人の学力は、図 2 のように、わずかに次郎さんの方が高い。

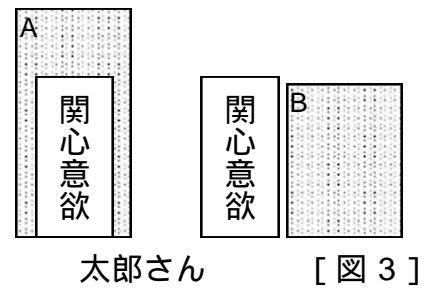
このことからわかるとおり、4 と 5 の境界線の設定によっては、AAA の太郎さんが評定 4 で、BBBA の次郎さんが評定 5 だということも十分ありうるのである。

知識理解	知識理解
技能表現	技能表現
科学的思考	科学的思考
関心意欲	関心意欲
太郎さん	次郎さん
[図 2]	

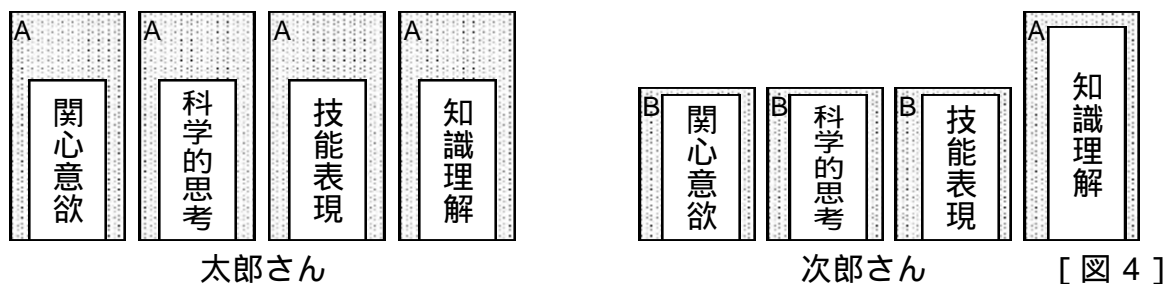
それなら、なぜ AAAA なら 5 だというような誤解が生まれるのか。それは「項目ごと複数回の評価で得た得点を、いったん 3 段階に整形してから合計して比べる。」という誤りを犯しているからである。「項目ごとに複数回の評価で得た得点を合計して比べ、3 段階に整形したものは合計しない。」というのが正しい考え方である。

文字面だけではわかりにくいので、図で説明する。

図3のように、太郎さんの関心意欲は、Bの“箱”に入れられる高さではないので、Aの“箱”に入れる。つまり、太郎さんの関心意欲の評価はAである。



同じようにすると、太郎さんと次郎さんの各項目は図4のように評価されるのである。



ここまでは問題はない。ところが、これを合計したとたんに問題が起こる(図5)。

次郎さんの方が学力の合計が高かったはずなのに、太郎さんの方が圧倒的に上位に立ってしまっている。このことはなぜ起こるのか。図5からわかるとおり、各項目の評価点の上部にすきまがあいている。その部分は得点のオマケなのである。

太郎さんは評価の“箱”の高さと自分の評価点の高さの差が大きくすきまが大きい。だからオマケが多く、評価合計が高くなる。次郎さんはすきまが小さいのでオマケが少ない。そのため、評価合計はそれほど上がらない。

この太郎さんと次郎さんの例に限らず、これではすきまが大きい者が評定の上で有利になってしまう。

これが、ABC3段階の評価を合計したものを評定に使ってはならない理由である。

